令和４年度島根県総合教育会議

日時：令和５年３月９日（木）15時～16時

場所：県庁分庁舎２階　教育委員室

○石原副教育長　ただ今から、島根県総合教育会議を開催いたします。知事、ご挨拶をお願いいたします。

○丸山知事　いつもありがとうございます。今日は大変お忙しい中、お集まりいただきましてありがとうございます。

県教育委員会では、「子どもの将来の選択肢を広げる教育」ということをキャッチフレーズに、理系分野への興味、関心や、学びへの意欲を喚起して、進路選択の幅を拡げる取組などに、重点的に取り組まれることが必要とされています。こうした動きは、今般４月に、島根大学に県内初の工学系学部が新設されるということにもマッチした、非常に時宜を得た取組であるというふうに思っているところでございます。

また、特別支援学校におかれましても、子どもさんの一人一人の教育に対応した、ＩＣＴを活用した教育に取り組まれている状況にございます。

本日はそうした、理系とかに限らず、子どもさんが帰ってこられる進路選択の幅が狭まっている様々な課題があると思いますので、そういったことを乗り越えて、この「将来の選択肢を拡げる教育」について、教育委員の皆様方から、忌憚のない御意見を頂戴したいというふうに思っておりますので、どうかよろしくお願いいたします。

○石原副教育長　会議の司会・進行につきましては、知事の指名により、教育委員会の教育監、柿本が行います。

○柿本教育監　本日のテーマは、先ほど知事からもお話がありましたとおり、「子どもの将来の選択肢を拡げる教育」についてです。

それでは早速、意見交換に入りたいと思います。私の方から順次指名させていただきますので、それぞれの委員からご発言をお願いいたします。それでは最初に池田委員からお願いします。

○池田委員　「子どもたちの将来の選択肢を拡げる」ということは、言い換えると、未来の可能性を高める教育の力をどういうふうに培っていくのか、ということに繋がっていくんじゃないかなと思います。

１月の末に東京で行われました全国都道府県教育委員会連合会に参加させていただきまして、大きなテーマが、いじめ・不登校の問題についてでした。文科省の説明でも、御存じのように、たいへん増えているということで、重要視しておられましたけれども、広島で取り組まれている、議会でも採り上げられてましたね、ＳＳＲ（スペシャル・サポート・ルーム）の取組などが、注目を浴びて、県議の方からも、問い合わせといいますか、どういうふうにやっていくのかという話が出てました。島根県が取り組んでいる支援センターというのではなくて、学校の中に、入口は別にして、気軽に入れるスペシャルな部屋を作って、取り組んでいるということで、注目を浴びておりました。私は、そこでも発言させていただいたんですけれども、違った視点で、いじめや不登校を生まない教育とはどういうものだろうかという問いかけをしまして、例えば、しまね教育魅力化ビジョンでも示されているように、地域、学校の取組が重要であるということを伝えました。島根県は、地域を知る、地域で体験する、地域で一緒になっていろんなことをしていってということを、すごく強調していると思うんですけども、隠岐の海を生んだのは、隠岐の伝統文化である相撲を彼が取り組んできたからこそだと思うんですよね。それを抜きにしては隠岐の海は生まれなかったと思うし、今も、小さい子どもから、小学生、中学生、女の子もそうですけど、相撲をしています。その中で、私の地区は五箇小学校の校区なんですけど、この地域のいいところはなんだろうかと先生が問いかけたら、子どもたちは、いい人がいっぱいいると言ったんですよ。それはどういうことかと言ったら、鍵なんか全然しないですけど、玄関に野菜とか魚が知らない間に置いてある。そういうことが日常的にありますね。地元の魚を釣ってきては、地域の人に配って、代わりに野菜をもらって、というのを自然にされている。それから、みんなが仲がいいということを、子どもたちが言っているそうです。もっと地域のみんなが助け合って暮らしていくには、どんなことが必要なのかなっていうことを、行政に伝えに行こうとか。診療所をこうしたらいいんじゃないかとか、み

んなが集まるのでね。そういう話を、子どもたちが、行政の方に伝えに行こうという取り組みがされています。小学校３年生が総合学習で、私、デイサービスをやっているんですけども、お年寄りさんに楽しんでもらう、喜んでもらうために何をしようかって話をしたところ、５回、６回ぐらい来られたんですけど、最初に釣りがしたいとか運動会がしたいと言われたんです。小学校３年生だと９歳、10 歳ぐらだと思うんですけど、その子どもたちのおじいさん、おばあさんって、元気でまだ働いている。デイサービスに来てみたら、90 代、100 歳の人ばっかりで、子ども達は、このおじいさん、おばあさんと何ができるんだろうかと子どもたちがすごく考えた。一生懸命考えて、話し合いをして、お年寄りさんたちを喜ばせるには、どんなことをしようかと。そこで、スカットボールというゲームがあるんですけど、それのふれあい五箇バージョンを考えて、得点もハンデによってつけるとか、一生懸命考えてので、お年寄りも喜ぶ。子どもたちも、お年寄りさんが喜んだのでうれしかったって言う。また、ふれあい五箇に行くからねということを伝えてほしいと。そういう取組が、多分、島根県のいろんなところで行なわれているんじゃないかなというふうに思っています。いろんな世代の人が、いろんな職業の人が寄り集まって、助け合って生きていくということが、子どもにすごく良い影響を与えるんじゃなかなっていうことを思いました。

一方、今の日本では、若者の凶悪事件や迷惑行為が多くなっていますが、その最たるものが、相模原のやまゆり園での殺人事件だと思うんです。でも、その事件を起こした若者も、学校教育の中で優しさが大事だとか、そういうことをきっと、学校の中では言われてきたと思うんです。優しさ、思いやり、道徳教育、そういうものを受けてきていながら、そういう大人になってしまう。それは、おかしいんじゃないかなということを、思わずにはいられない状況かなと思っています。

その東京で行われた会議の中で、23 年度の重点取組として、スクールカウンセラーとか、スクールソーシャルワーカーを、週３時間派遣していたのを７時間にしようとか、さらにきめ細かに教師が目を向けられるようにしたいということを、文科省はおっしゃっておられましたけど、ただでさえ多忙な先生たちが、そういう環境の中で子どもたちのことをしっかり見てあげられる状況ができるのかなあと、すごく懸念します。「先生は、一生懸命頑張っているから、大変なんだよ。僕が、先生にまたなんか言ったら、相談したら、先生が病気になっちゃうよ。だから僕は我慢するよ。」と言った子どもさんの言葉が載っ

ていましたけど、子どもの気持ちを押し込めなきゃいけない状況は、とても危惧することじゃないかなと思います。

隠岐の海は、隠岐水産高校の漁業科で、航海術を学んでたんですよね。それで、島根県の練習船、神海丸に乗って、船長になろうと思ってたと思うんです。でも、思いがけない出会いで、土俵に上がることができたという、未来の可能性っていう意味では、何があるか分からない。佐野史郎さんも、高校の先輩なんですが、個性派の俳優として、演劇人として花開いたということもありますので、やっぱり教師が、出会いの中で、特に中学校だと思いますが、教師が子どもたちを励まし続けてあげることが、どんなに大事かってことをすごく思っています。そういう教員が島根県にたくさんおられて、これからの時代を輝かさせてくれたらなって心から思います。

○**柿本教育監**　続いて、朋澤委員お願いします。

○**朋澤委員**　まず、12 月には、島根県の保育研究大会にお越しいただきましてありがとうございました。みんな意を強くいたしましたし、大変喜んでおりました。同じく県の保育研究大会が、令和６年度に、吉賀町の保育所４園が、集まって研究発表いたします。その研究発表の主題と言いますか、研究テーマを決めるのに、吉賀町の子どもたちの、気になるところを挙げてみようという話し合いになりました。一つは、吉賀町の子どもたちは、初めてのことに対してちょっと消極的であり、ちょっと怖がる、恐れるところがある、なんか自信がないのかなあと。２点目に、言葉による伝え合い、話し合いで、自分の気持ちをもう少し活発に表現できたらいいのになあと。もしかしたら、言葉数が少ない、語彙が少ないのか、表現方法がわからないのか、というような２点の気になる点が出ました。園児の近い将来といいますと小学校入学ということになりますが、学校に行った時に、そのかわいい子どもたちが困ったりとか、悲しかったりとか、そういう状況は保育所の職員としては、とても避けたいところでして、子どもたちには、「困ったら『困ってるよ、助けて』と言えばいいよ」、小学校に行く時に、保育園出た時に、「あなたは、しっかりいろんな経験をして、いろんなことができて、本当に素晴らしく、かわいく、大きくなってるから、安心していいよ」と送り出します。でも、その言葉ではなく、ただ、子どもの中に、自分の中の出し方というか、小さい子は小さい子なりに、やなり自分の持っているものに対して安心をしないと、やはり、小学校入学というのは不安だろうなと思うので、きちん

と胸張って小学校に行けるように、言葉と自信を育てて、小学校に入学させるということが私たちの仕事だろうなと、常日頃、職員とも話をしております。このことから、幼・小連携接続の一つとして、ちょっと取組をしていることをお話ししたいのですが、基本的には、年間を通じて、小学校と幼児の教育であるとか、また、架け橋プロブラムで小学校とも連携を取っているところですが、その中でも、保育所の基本的な取組を今日聞いていただけたらと思います。言葉と自信というところから話させていただきたいと思います。

一つは、小学校に行く子どもたちに、言葉と自信をしっかり持って、大きくなってもらいたいということで、職員の仕事一つとしては、子どもの気持ちを語る、これは島大の肥後先生が、講演の中でも「象る」という言葉をよく使われるんですが、泣いている子どもに対して、「何々だから悲しかったんだね」、「こういうことが嫌だったんだね」っていうことを、ちゃんと、大人が言葉にできない子どもの気持ちを言葉にして、子どもに返してやる。また、オムツを替えたりするときも、「オムツが濡れたね、気持ち悪いね、きれいにしようね」と言葉をかけながら、気持ちと行動を言葉にして、子どもに返して行動に移る。また、２番目には、本の読み聞かせによる言葉と心の調整。できるだけ近く、できれば抱っこして、本を読んでやりたいな。３番目に子どもの話をしっかり聞く。親としての自分を振り返った時に、わが子の話をどれだけ、手を止めて、聞いてやったかなと思うと、反省することばかりなんですが、やはり、子どもが話したいと思うときに、しっかり話を聞く。小学校、保育所もですけど、学校でも、きっと子どもたち、先生達にたくさん話したいことがある。保育園もみんな「聞いて、聞いて」の状態なんですが、それをどれだけ職員が、余裕を持って聞けるか、そういう状況ができているのかどうかというのも、私の中では問題です。また４番目に、ほめる。このほめるというのも、ただほめればいいのではなくて、具体的に、「何々ちゃんは、きれいな声をしているね」とか、「何々ちゃんの挨拶は気持ちがいいね」とか、「何々ちゃんがしてくれて助かったよ、ありがとう」って、その子がその子の良さを感じられる、良いところを持って小学校に行けるようにと思ったりしていますので、そのような日常のやりとりの積み重ねが、子どもの言葉と自信につながるといいなと思っています。

また、幼・小接続の取組の２つ目として、近いところで、来年度の令和５年に、先ほどの島根県の保育研究大会が 10 月に益田市であります。益田のグラントワの大ホールを使いますけども、その大会のオープニングセレモニーとして、蔵木小学校の 21 名の子どもたちの太鼓演奏をしてもらおうと思って、今、会のほうに、推薦をさせてもらっています。

蔵木学校の、島根県で一番西の端の小さな小学校の子どもたちを、全県下でする島根県保育研究大会、全体でも 400 人くらいなんですが、その人たちの前で、しっかり太鼓をたたいてもらって、小さい小学校でもこんなパワーがあるんだということを、ほかの園の職員、保育所の職員、先生たちにも聞いてもらいたいと思いますし、小学校から学校に繋がっている活動なんだということも知ってもらいたいと思います。小学生が来てくれると、保護者さんが来られる、そこに学校の先生も来られる。保育所ってこういう研修の機会を持っているんだとか、また、子どもたちも、「保育所の先生って、大人なのに、まだ勉強するんだ。こうやって集まって勉強するんだ」というような大人の姿も見せることができていいかなと思って、小学校の子どもたちを連れていこうと思っているんですが、何より、子どもたちの発表の場を、思いがけない発表の場とか、日頃会わない人たちの前での表現とかいうことをすることによって、自信をつけてくれたり、思い出を作ったりしてくれたらいいかなと思っています。

島根創生計画にもありましたけど、発達の段階に応じた教育の振興、そのスタート段階となる保育所の時代も、しっかり小学校に繋いでいきたいと思っていますし、これからの子どもたちは、自信を持ち、自分の思いを、自分の言葉で表現して幸せな大人になってくれるよう、周りの人を巻き込みながら、何より私自身が楽しく尽力してまいりたいと思っています。

私は自分が幸せな人生を送っているなと思うんですよ。もちろん向かい風もたくさんありますけど、そういう時に、どうやってその時間を、辛い時間を過ごすのかなと思った時に、言葉で考えて、次の自分の行動も言葉で整理して、言葉で考えるのは、やはり人間の特性かと思っていますので、言葉をしっかり、小さい時から、子どもたちに入れていきたいと思っています。言葉と自信をこれからも子どもたちと一緒に紡いでいきたいと思います。

○柿本教育監　次に、河上委員お願いします。

○河上委員　それでは私の経験から、二つ述べさせていただきます。

まず一つ目は、総合的な学習やふるさと学習の重要性についてです。先ほどから池田委員からもお話しがありましたが、都市部に比べると、やはり島根県のような人口の少ない地方では、子どもたちがいろいろな大人や、生き方を含めた、多様な情報に触れる機会と

いうのが、圧倒的に少ないのではないかと思います。このような情報の格差が、子どもの人生の選択肢を無意識のうちに狭めてしまう可能性もあるのではというふうに思っています。意識や情報や経済の格差が、学びの格差の根本的な原因にもなり得ると思います。大切なのは、学生のうちに、できるだけ多くの人に出会って、またいろんな経験をすること。外の世界に触れる機会を増やすことが非常に大切なのではと思います。

つい先日ですが、小学６校年生の児童が、自分たちの町の未来を考える発表会を企画してくれまして、案内があったので行かせていただきましたが、これは６年生の国語の教科書の中に、「町の幸福論」という、「コミュニテイデザインを考える」というテーマといった授業の教材がありまして、その授業を受けて、学校ではさらに発展的に学びを深めるために、実際、市内のまちづくりを進めている地域講師を学校に招いて、講演を聞き、児童が自ら町の課題は何かなとか、自分たちに何ができるだろうかということを考えて、自らいろいろな提案を発表してくれました。国語から地域を学ぶ、社会科や、また、町の環境を考える理科などの教科横断型の学習に繋がっていると思い、非常にいい取組だなというふうに思いました。児童の提案の中には、人と人との関わり合いのある、地域の特性にあふれ町にしたいとか、豊かな自然が守り続けられる町にしたいとか、また自然と触れ合う会を組織して、使われなくなった畑で農業体験をしたり、古民家で料理を地域の人と一緒に作って訪問者が交流を深める、そういった企画もしてくれました。最後には、地産地消を意識した自分たちでオリジナルのメニューを開発して、試作を重ねて、また、地域の食のボランティアのご婦人方と一緒に料理を作って、最後に私たちにも、おもてなしをしてくれました。そういった機会を、子どもたちは、自分たちで考えていい企画をしてくれて、また、パソコンのパワーポイントなども使いこなして、ＩＣＴ教育の成果も見られるといういい発表でした。児童の町のことを思った頼もしい発表会に、聞きにきた地域の人たちも非常に感心させられて、元気や活力をもらったという高齢者の方もたくさんいました。児童のふるさとへの愛着の心が育って、更に貢献意欲とか、実践力も高まっていくというのも実感させられました。

また、先日は、県立高校のふるさと学習や、また地域課題解決型の学習の実践発表会も視察しました。高校生が参加した、多文化共生をテーマにしたイベントでも、高校生と一緒に活動しましたが、やはりこれも地域に密着した、様々な学習や活動の中で、非常に生き生きとした生徒たちの様子を見ることができて、実際、地域で生きるために必要な力も育まれ、多様な人と人との関わりやコミュニケーションも身に着く、それから地域の未来

を一緒に考えて将来、地域で関わりたいとか、支えたいという思いも自然と身に付くのではということで、とても大切な時間だなと思いました。発表を聞いて思ったのは、この学習は与えられたことを、どのくらい覚えているかというよりも、与えられたテーマをどう解決していくかという思考力を求めることや、考えたことをどう伝えるかというコミュニケーション力や表現力を身に付けることが非常に大切だと思いましたし、また、豊かな思考力を身に付けるために、試行する練習というのが必要で、それをアウトプットしたり、ディスカッションする場をもっと多く提供するべきだなと思いました。

この課題解決や、価値の想像のできる人材を育成するという教育としては、フィンランドでも特長的な教育がありまして、それが 1994 年から始まったものですが、アントレプレナーシップ教育というもので、これを訳すと起業家精神教育となりますが、フィンランドでは、自分で自分の人生を切り開くための力を育む教育として実践されていて、学校、地域、社会、また、企業が密に連携して、協働して、子どもたちを年齢に応じていろいろな体験をすることができて、将来実社会で活かせる力を身に付けるというものです。これを参考にすると、今後もっと、学校が、地域や社会、企業などと協働、連携が必要で、子どもたちは、もっと、もっと地域や社会の課題を自分事として捉えて、失敗を恐れず、新たな価値やビジョンを想像できる、そういった人材を増やすことが、島根の未来にも大きく関わるのではないかというふうに思います。

もう一つは、フィンランドの学校を視察した時に思ったのが、学び直しというシステムの良さです。これは、フィンランドでは、９年間の義務教育の終了後に生徒の意思で、１年間学び直しというのができる制度があります。日本では留年のような、そういうネガティブな印象を捉えられるかもしれませんけど、元々フィンランドは、人と比べない教育というのを基にしているので、一人一人のペースに合わせて学ぶという、そういう考え方が受け入れられています。ネガティブな印象を持たれず、この１年は自分にとって、学んで、また、余白の時間という考え方として捉えられています。中学校にも今さっき、広島の例がありましたが、中学校の中にフリースクールというような居場所がありまして、これも非常にいい取組だなと思いました。少人数の教室も設けられていたり、また、障がいの有無に関わらず、少し休みたいとか、少し後で学習をしたいという生徒が安心して通える居場所があるというのが、非常に日本の不登校の生徒が多い、こういった今の課題にも、何か参考になるものじゃないかなと思います。

大人になっても、いくつになっても、自分が学びたいという時に、学び直しができるという、そういったシステムや、周りからの温かい、見守りの気持ちも非常にそういった環境が整っているというのが、いいことではないかと思っています。もちろん、フィンランドは、国民全て、教育が無償で受けられるという大きな違いがありますけれども、それだけではなくて、やはり国民一人一人が、幸せに生きるために何をしたらいいかなというのをゆっくり考えて、また、余白とか、余暇を非常に大事にして暮らしているというのも、ちょっと参考にしたいなという気持ちで視察をいたしました。これは仕事でも、また、教員の働き過ぎ、忙し過ぎると言われるような働き方改革や、教員不足にも影響するのではないかなと思いまして、少しゆっくり時間を使う、余暇を大切にする、余裕を持った暮らしをするというのは、少し自分たちの生活に取り入れていかないといけない、そういういい取組だなというふうに思いましたので、少しでも参考になればと思いまして、紹介させていただきます。

○柿本教育監　続いて、原田委員お願いします。

○原田委員　私は県のＩＣＴ教育の取組につきまして、教育委員として、小学校や中学校、特別支援学校の視察とか、高等学校の研究発表等への参加を通しまして、機器の活用と教育実践の充実が、やっぱり進みつつあることを実感してまいりました。本日は、この中でも、視察で行った、病弱の養護学校の松江緑が丘養護学校の実践から感じたことをお話しさせていただければと思います。

まず、ＩＣＴの活用で私が一番びっくりしましたのは、訪問教育対象児の学習でした。訪問教育対象児は、週のうち２日か３日、その１日も２時間から３時間という限られた時間の中で、家庭に教員が行って、マンツーマンの学習をするほか、月１回、学校の方に行って、スクーリングという形で、学校の子どもたちと活動するのがほとんどでした。ところが、コロナ禍の中でのＩＣＴというのが非常に大事なことということで活用されることで、緑ヶ丘では、学校と家をつないで、家で学習に参加できるという姿をとっていらっしゃいました。私も以前訪問教育をやっていたんですけども、当時は考えられないことが、今このように子どもが、学習の拡大の機会が広がってきたんだなあというのを目の当たりにしまして、本当にうれしく思うと同時に、機器の活用が、このように広く活用できて、さらに、子どもたちの学習の機会が拡がることを願っております。これは訪問で見ている

子どももさることなんですけど、保護者や家族の方にも、充実した教育の実践になっているんじゃないかなというふうに思っています。

そしてその次が、これも緑が丘の実践なんですが、中学部の不登校の生徒に対してのオンライン授業です。これも文部科学省からは、不登校児童生徒に対して、オンラインの授業の推進というような通知をされているというふうに伺っております。実態として、まだまだ普及には至ってないということでございます。その理由を校長先生に伺ってみたら、一つは先生たちが、オンライン授業をしてしまうと、子どもが安易にこっちが楽だからと学校に来なくなる。もうこれでいいんだという形になることで、不登校に拍車がかかるのではないかとういう不安が先生たちに多いのではないかと。それはそうかもしれません。それからもう一つは、やっぱり普段は忙し過ぎて、機器の準備とか、なかなか負担であるというところが、普及しないところではないだろうかなというふうに言われました。もう一つは緑が丘も実践しますので、小学校や中学校の先生方に様子を見に来てくださいと。実践してくださいとアピールしても、子どもを置いて出れないというような、負担軽減のこともありますけども、そういう部分の三点くらいで、なかなか普及しないのかなということを話していらっしゃいました。ただ、緑が丘もですね、同じようにそういった不登校の子どもの学習の確保も、オンライン授業をしようといった時には、やはり校内の先生方からも、「学校来なくなりますよ」というような声が聞かれて、担当のドクターさんも消極的ではあったんですけど、地道に話し合いをしてから、実際取り組んだら、まだ１日じゃありませんけれども、２学期から午後は全て授業にオンラインで参加できるようになったということ。これも来にくかった子どもが、授業と違う感じで、仲間と一緒に同じ進度で受けられるということは、子どもの学力の保証には、大事なことではないかなと思っております。登校しても教室に入りにくい子どもたちが、保健室に行った者が帰ったりしますけど、別室で、そういうふうなリモート授業も私は可能だと思うんです。もし準備等が負担だったら、例えば支援員さんが入っていらっしゃいますので、支援員さんの数を増やすのはなかなか厳しいかもしれませんが、１時間でも時数を増やすことによって、その準備等を業務の一つとして取り組んでいただくような、いろんな考え方でアプローチして、子どもたちが学習をする、進路に繋がるような学力をつける。そういう部分に保証が出来て、ＩＣＴ教育をさらに活かされることを願っております。

子どもの居場所づくりというのがいろいろなところでできています。ただ、その居場所で、学力がしっかり付く、同じ勉強ができるという部分が必要かなと思います。子どもた

ちが学力をしっかり付けて、進学して、自分の夢や希望をそれぞれがかなえることができるためにＩＣＴ教育を活用したり、リモート授業の学習の確保が必要ではないかなというふうに、改めて視察を通して思いました。

もう一つは就労についてです。これも緑が丘の実践の中で伺ったんですけど、卒業後も、病気の関係で病棟で治療を続けているお子さんがいらっしゃいます。もう若者です。もし、彼は、何もなければ、社会経験の限られた空間の中で生活を続ける可能性が高くなる若者です。ただ、彼は、高等部の時から、特別支援学校では、現場実習という企業に実際に行って、自分の夢や希望を持って体験することによって、就労とかにつなげていくわけですけど、これを積み重ねる中で、中小企業の企業同友会だとか、障がい者研究部会で、共に働く機会とか、働く在り方を学校含めて考えてきました。地域社会とか企業との連携の中から、障がい者理解というものが深まって、拡がってきているのを実感しております。彼は今現在どうしているかというと、病棟にいますけれども、企業の名刺の入力作業の仕事を任されて、病棟からやっております。働くことを通して、社会参加を実践して、生き生きと生活している姿。これもやっぱりこの子どもの将来の選択肢を選んでいく一つになるんじゃないかなと思っております。高等部段階での学習で、高校と病棟をつなぐリモート学習を、彼はベッドサイドでやっておりました。そういう部分がＩＣＴを活用して、企業ともそういう形で、現場実習を繋げていったことが、就労意欲につながったものだと思っております。ですから、今後も、ＩＣＴを活用した教育というものが、子どもの将来の選択肢を拡げる教育の大切な分野になると願っております。

○**柿本教育監**　最後に、生越委員お願いします。

○**生越委員**　まず、先にこの場をお借りしまして、お礼を述べさせていただきたいと思います。先日は、娘も高校を無事に卒業させていただきました。３年間で制約がある中でしたけども、３年間の中で初めての対面での卒業式をすることができまして、先生方や、隠岐島前高校だったんですが、島の方々の優しさ、温かさですとか、高校生や保護者の方々のパワーを直接感じとることができました。どの方もおっしゃっていましたが、本当に対面でできてよかったなと、感慨深い、良い卒業式ができたなと皆さんおっしゃっていました。これも知事をはじめ皆様のご尽力のおかげと思っております。本当にありがとうございました。

私の方からお話しさせていただきたいのは、直接体を動かして体験することの良さについてです。

私のところは専業農家をしているのですが、コロナで中止になるまでは、15年にはならないんですけれども、毎年、近くの幼稚園から依頼を受けて、田植えと稲刈りの体験を子どもたちと一緒にやってまいりました。ほぼ初めての子ばかりで、年に１回の経験ですが、年に１回の数時間の中でも、子どもの目覚ましい進歩というのが目に見えて分かる。泥んこに入って、最初は嫌がっていた子が、１回歩いたら、もう大人の支えを必要としなくなる。鎌を使わせれば、小さなお子さんは大人が一緒に持ってやるんですが、年中、年長さんになってくると、どんどん一人で鎌を持って、刈って、稲刈りをしていけるようになるということを実際に目で見て、子どもの成長ってすばらしいなと思って見ていました。もちろん、田植えや稲刈りそっちのけで、生き物探しをしてみたり、草花を取って喜んだりするお子さんもいたんですが、それもまた、楽しい経験のひとつだと思います。

この幼稚園は、30年も餅つき会を年末にされていたんですが、この餅つきは蒸籠で、実際に餅米を蒸して、石臼と杵を使ってやります。これも子どもたちほとんどが初めての体験です。餅米が餅になるという変化を目で見て、実際に触って体験することができるということで、これも大人の方の中にも蒸籠の使い方がわからなくて、これはどうやって使うんですかという方もいらっしゃる。大人にとっても、ものすごく良い経験ができていたと思います。これらのことから、実際に身体をを動かす、五感を使っていろいろな体験をできるということで、運動能力の向上にも、すぐにではないですけども、役立ちます。自然科学への興味関心を持つ、まずはほんの第１歩ですけども、大切な第１歩になると思います。また、こういった体験というのは、どこでもできることではないので、やっぱりふるさと、大きくなった時に、「私、こんなことをしていたな」という、ふるさとに愛着を持つ一つにもなると思いますし、地域の方々が関わることによって、子どもの元気のパワーを大人がもらって、大人も生き生きしてくる。これもすばらしい、大人にとってもすごく良いことだなと思って見ていました。今、オンラインで何でもできるようになったし、触った感じが分かるというようなＣＭも出てきている。今後どんどんそういうことが発達していくと思います。そして、勉強も今、原田委員がおっしゃっていましたが、ＩＣＴ教育もすごく大事なことだと思っています。一方で、こうやって自分で動くことの大切さっていうのを大事にしていきたいなというふうに私は思っていますし、その環境が島根県には十分整っているのではないかなというふうに思っています。

○**柿本教育監**　それでは、知事からコメントをいただきたいと思います。

○**丸山知事**　全体として、幅広い御指摘していただきまして、本当にありがとうございました。私が考えたフレームといいますか、実は選択肢を拡げるということでいくと、普通の水準があるとすると、今の状態より良くするということと、今の状態で良くないところを良くすること、二つあると思っていまして、原田委員からご指摘があった話は、これまでの訪問学習では、十分な学習機会を与えることができなかった状況を、ＩＣＴを使って改善をして、よりたくさんの時間、必要な勉強をする機会を与えられるようになってきたということをきちんと拡げて、特別な学校だけではなくてより拡げていくということ、それから、不登校の方に対して学習機会が失われているという今の現状を改善していくということを考えていくべきだというご指摘だというふうに思いますけども、可能性を拡げるというのは、「可能性が狭まっている子どもたちの可能性を拡げる」ということをきちんとやっていくっていうこと。

不登校をそもそも生じないようにするためにどうしていったらいいかという池田委員のお話は、そこに至らないようにしていく。実際には起きてしまう、起きてしまっていることに対してどう対応するかということを、きちんと考えないといけないというふうに思いました。

そして、河上委員からのフィンランドのお話をいただきましたことについては、これまで進めている、様々な学科横断的な総合的な学びというものを、もう１回拡げていくか、より進化させていくかという意味で言うと、これまでのものをより良いものにしていくという話だというふうに思います。

生越委員がおっしゃったお話も、学校の中で言いますと、学校の外で、実際に仕事をしておられる方々の、地域の皆さんの御協力をいただいて、学校の中では経験できないことを、身体を動かしたり、実際に五感を通じて体験してもらうという機会を、学校を中心に作っていくということと考えます。

朋澤委員がおっしゃった幼・保・小連携については、子どもさんが小学校に上がっていく時に、いろんな障壁がないようにして、いかに小学校に上がってもらうか、また、小学校の方でいかに保育園の現状を知ってもらって、適切な教育をしてもらうかってことが非

常に大事だということを含めて、どのように今の教育の内容をより充実したものにしていくか、二つ大事だなというふうに思ったところでございます。

実は共通するのは、学校の先生が忙し過ぎて、今以上のブラッシュアップのようなことに対応していくのが難しい状況であり、やはり、島根県教育委員会でも苦労しておりますように、志望される受験者が減っている状況になって、なおかつ、採用辞退があったりして、最終的な採用の段階で欠員が生じてしまっている。35 人学級を導入しようにも、教員を確保できないので、38 人学級やむなしというようなことになっている、ということもあります。いろんな、子どもさん方の、この教育を充実していく、可能性を拡げていくということを今以上に進めていこうと思うと、若干、今やっていることを省いていく必要もあるんじゃないかと思います。総合的な学習の時間も大事なんですけども、それが負担ではないか。地域社会に出て行くことも大事なんですけど、それが負担になっているんではないかと。これは先ほど二つのフレーズなんですけど、質をあげていくということとベースアップしていくということ、そこのバランスを取っていかないといけないんじゃないかなと私は思っていまして、そういう意味では、総合的な学習を、先生個人にお任せするではなくて、一定程度スタイル化して、一定のやり方である程度ベーシックなところはできる、そこをどう工夫するかということが必要ではないかと。私が小学校、中学校の頃には、総合的な学習時間といのは無かったので、先生の負担として増えてると思うんですね。県としても、県教委としても進めている、ふるさと教育が、30 年前は無かったと思いますので、そうやって増えているんだと思うんですね。なおかつ、なかなか特定の学力が落ちているってことはどうしても、そういう特定のフォローが必要になり、それも年々付加されている。そういうところを、ある程度オミットするとか、ある程度合理化するとか、ある程度定型化するとかいうことをしていきながらでないと、いけないんじゃないかなと。高校の情報の授業もそうですけど、科目は作ってみたけど、教える先生がいないとか、そんな科目の作り方があるのかというようなことが普通に行われていますけど、それこそがまさに、学校の先生方が苦労しているところでしょう。全国の受験生が全部受けるような試験に、筆記を入れるのか、ヒアリングを入れるのかってことで、直前でドタバタするっていうような話っていうのは、典型的に文部科学省の指示が悪いという話もあります。文部科学省が教員テストを配布しても、人が採用できないんじゃ、まさに絵に描いた餅を配っているのと同じ世界になりつつあるっていうのは、本当に教育の危機だと、公教育の危機だと思います。二つの側面として、子どもさんの可能性を拡げるための、底上げの部分

とブラッシュアップの両方を今まで以上にやろうと思うと、今までの仕事の内容、先生方にやってもらっていた内容、学校にお願いしていた内容を、やっぱりスクラップアンドビルドしていかないといけない。だからＩＣＴの話っていうのは、お金をかけることで、設備投資をすることで改善できる、対応できることだと思いますが、一方で、研修の機会が確保できません。つまるところ、やっぱり、いろんなことをやらなきゃいけない。委員の皆様からご指摘いただいたとおりだと思いますので、そこのことに先生に対応してもらうために、何を省いていくか、何をやらなくていいということにするかということを、セットで取り組む必要があるのだろうと。それを拝聴しなきゃいけないという意味では、県知事の仕事でもあります。しかし、仕事を減らしていかないと、いろんな仕事を文科省から押しつけられているだけじゃ改善しませんので、既存業務の見直しがやっぱりいるんだなというふうに思ったところであります。

やっぱり、原田委員おっしゃったように、学びの保障ができていないというのは、本当に深刻な状況だというふうに思います。池田委員おっしゃったように、不登校の子どもさんの教育をどうするか、親御さんに時間的余裕があって、小中学校までの勉強を根気よく教えられるというご家庭ですと、家庭学習ってことで済むかもしれませんが、そういう家庭はなかなか多くないわけです。不登校に至らないように努力をしながら、至ってしまう子どもさん方に、どうやって学習という側面と、通常の学級じゃ無いかもしれませんけれども、人との触れあいをどうやって確保していくのかということについて、大事な課題だというふうに思います。若干、ブラッシュアップするところはよく見えるので、そちらに相当、力を削がれてしまって、基礎学力をきちんと身に付けさせてあげるっていうところ、河上委員おっしゃった学び直しのようなところですね、学び直しって、６年間とか終わった後で学び直しじゃなくて、遅れたところで、出来るだけ早く取り戻していかないと、積み上げの教科っていうのは、ずっと尾を引きますので、早めに躓きを直すっていうのが、やっぱり、先生がその都度テストの採点をする中で、どこの時点で、どこで躓いているかってところを分析をして、中学校２年生でも戻るところは小学校４年生の算数であったりするわけなので、それができる余裕を作ってあげないと、作らないといけないってこともあるかと思うんですね。ブラッシュアップの部分とボトムアップの部分のバランスの取り方を、もしかすると親御さんの希望とか、本人の希望とかっていうのも、ちょっとブラッシュアップにこれまで、特に 20 年くらい、国の政策としては力を置いてきたので、それで失っているものがあるんじゃないかなと。実際、中学校までで習う漢字、基本的な数学

とか算数の内容って、やっぱりできないと、社会生活で実際、損得勘定を計算するとか、情報を得るとか、先ほど朋澤委員がおっしゃった「言葉にする」とか「自分で表現していく」って時に、本当に損をするといいますか、それがないことで不利益を被りかねない内容だと思いますので、基礎学力をきちんと、どうやって、それは不登校という話だけではなくて、教科の勉強の中で、躓いても、学び直しじゃないですけど、そういう機会が与えられるようになるかというのは大事な感じがします。より良くしていく部分と底上げしていく部分、それを出来る体制をどうつくっていくかということ、この三つが大事なのかなというふうに思っております。

○**柿本教育監**　ありがとうございました。以上で、島根県総合教育会議を終わりたいと思います。